民間版画 ①

天理大学附属天理参考館学芸員
中尾　徳仁　*Norihito Nakao*

中国大陸や台湾の庶民が、生活の中で使用・消費していた印刷物を総称して「中国民間版画」（以下、民間版画）という。当館はこれらを約 500 点所蔵している。

民間版画は、大きいものはタタミ一畳くらいから、小さなものは郵便切手くらいのものまである。かつては多くが木版印刷だったが、半世紀前頃から石版印刷によるものが主になり、近年はほとんどが樹脂板印刷やオフセット印刷である。民間版画は浮世絵のような単なる鑑賞用の版画ではない。その用途は幅広く、礼拝の対象である神像図から室内装飾の吉祥画、菓子や線香の包み紙、遊具（凧絵、双六、紙牌など）、壁紙や刺繍の型紙までも含む。しかし同じ木版印刷で作られていても経典や書籍は別のジャンルに分類し、民間版画からは除外して考えられている。

民間版画は専業の版画職人が制作するもの以外に、農民などが農閑期を利用して制作するものがある。その販売法は「専門の工房・画店を設けて売る」、「祭祀用品店で版画以外の商品と共に売る」等があるが、民間版画が最も多く消費される時期が旧暦の年末から正月であることから、新年を控えた市や廟会（各寺廟で行われる縁日）の露店で売る方法が、かつては最も一般的だった。

その分類方法には諸説あるが、筆者は以前から、張道一「中国民間木版画－その概念と分類の試み」『日中台国際シンポジウム論文集　封印を解かれた中国民間版画』（日本民藝館、1997 年）に基づく分類を用いている。張は上記論文において、民間版画を門画・紮糊・神像図・紙馬・年画・窓画・燈画・幡画・挿図・印記・遊芸・その他の 12 分類に分けることを提案した。

年末に売り出される民間版画の代表的なものが、「年画（ねんが）」（部屋を装飾する。吉祥図や物語の図）や「門画（もんが）」（門扉に貼る。家を守る「門神（もんしん）」や吉祥をもたらす天官・仙女・童子の図）、「神像図（しんぞうず）」（天地三界の神、財神、竈神など）である。また以前は、願いを込めて焼く「紙馬（しば）」や「紙銭（しせん）」（金紙・銀紙など）や、祭事・葬儀に使う紙の作り物（これを「紮糊（さつこ）」という）にも民間版画が多数使用されていた。

近年、その使用量は著しく減少したが、引き続き日常的に消費されているものもある。例えば玄関扉に前述の「門画」が貼られている姿は、中国大陸や台湾などで広く見られる（図 1）。そのほとんどはオフセット印刷の門画で、中には企業名や商品名が入れられたものもある。宣伝用に企業が配布したのだろうか。このように形態は多少変化しながらも、民間版画は生活の一部となっている。決して「既に消え去った文化 」ではない。

（図 1）大門（表門）に貼られた門神図
（2006 年、江蘇省南通にて筆者撮影）

さて、民間版画についての記述は、宋代に書かれた孟元老『東京夢華録』（北宋時代の都である開封の繁栄ぶりを追懐した随筆）で既に見られる。その他にも 19 世紀末に記された敦崇『燕京歳時記』（北京とその周辺地域の歳時記）、永尾龍造『支那民俗誌』（民俗学視点から中国の風俗を記録したもの）など、幾つかの文献が散見される。しかし 20 世紀初期の時点では、まだ系統立った研究は少なかったようだ。瀧本弘之によると、早期に発表された研究として最も注目すべきは、美術研究所編『支那古板畫圖録』（1932）に収録された黒田源次「支那板（ママ）畫史概觀」と同「姑蘇板（ママ）」の 2 本の論文であるという。その理由は、今日通説化しているいくつかの見解が、上記論文で初めて提起されたことによる。筆者の黒田源次（1886 ～ 1957）は後年に奈良国立博物館館長を務めた人物で、その研究分野は版画のみに留まらず多岐にわたる。

20 世紀中頃以降は王樹村、馮驥才、潘元石、楊永智、三山陵、瀧本弘之らが、それぞれ優れた研究成果を発表している。特筆すべきは、馮驥才総主編による『中国木版年画集成』全 22 巻（中華書局、2005 ～ 2011）であろう。この集成は中国の国家プロジェクト「中国木版年画搶救与保護工作」の成果をまとめたものである。本「工作」は、中国国家社会科学基金の委嘱を受けた中国民間文藝家協会（中国文学藝術界聯合会の下部組織）により、2002 年から約 10 年の歳月を費やして進められた。全 22 巻は、各地に残された古い版画の写真や、版画職人に行ったインタビュー等を掲載することはもちろん、これまで「版画の制作地」としてほとんど知られていなかった地域の資料までも幅広く紹介している。なお、総主編の馮驥才は中国民間文藝家協会主席で、2012 年現在も精力的に民間版画の研究や保存活動を続けている。

上記集成が画期的なのは、中国大陸や台湾の各地域に加え、『日本蔵品巻』と『俄囉斯（ロシア）巻』が含まれる点である。それまでは外国にある中国民間版画を詳細に紹介する文献は僅かであったので、これは大きな特徴と言えるだろう。特に我々日本人研究者にとっては、日本国内の民間版画資料を詳細に調査し、網羅的に紹介した『日本蔵品巻』は非常に役立つ研究書である。この巻を編集した三山陵によると、2011 年時点で日本国内において確認できた中国民間版画は約 2,200 点（ただし 1945 年以前に制作された木版印刷物に限る）で、このうち博物館・美術館・図書館の所蔵は約 1,800 点、個人による所蔵は約 400 点であるという。

『日本蔵品巻』には、当館が所蔵する民間版画の写真が 6 点掲載されている。その他に所蔵資料が掲載されている施設は、海の見える杜美術館（広島県）、早稲田大学図書館（東京都）、秋田市立赤れんが郷土館（秋田県）、名古屋大学図書館（愛知県）、神戸市立博物館（兵庫県）、町田市立国際版画美術館（東京都）、大和文華館（奈良県）、東洋民俗博物館（奈良県）、静岡市立芹沢銈介美術館（静岡県）、高麗美術館（京都府）である。